[illegible]

三十日夜　相州一酒匂　松濤園より一泊、[illegible]間近く富士を望み　松原[illegible]する夕汐の趣佳し。　蒲鉾屋を過ぎ外部を眺む

年の瀬や　鶏の聲　波の音

三十一日　小田原見物、[illegible]遊女屋軒を並べて賑ふ。[illegible]ぼんぼり通る　風呂敷掛めぐ

北八と伴ふ、[illegible]

[illegible]、一万年町とふ名代の蒲鉾を見る、[illegible]小田原の城を見る、二宮尊徳翁を祭る報徳神社詣づ　本ノ鳥居より皆子子輪飾をかける洲ぶど太く神寂びいふ。

天利より書翰　氏の料理屋の角まで小杉天外氏[illegible]より逢ふ、[illegible]亟鈴より趣く途中雲[illegible]鉄の線路より踏み迷ひ[illegible]危い橋を渡ることなどあり午後四時半塔の澤着。

宗かく料理の盛梅酒の味ハ少々田神明まで[illegible]北八大不平、知れども

…午後四時半塔の澤着

家のかゝり、料理の塩梅、酒の味すべて
田紳的にて（以前は[redacted]北八大不平、然れども
[redacted]温泉は[redacted]鉛川より
吹さらずの手水鉢に南天の實と一把の
水仙を交へさしたるなど風情ありなべ
からず。又おもひかけず久保飯田の両氏に逢ふ。

□こゝに一夜あけの春、女中頭のおぬひさ
ん（此の妙え[redacted]の名未だ定まらず、大方
然らんと思ふ）朱塗金蒔絵三組
の盃[redacted]子飾つきの銚子を添へ喰積の
膳を目八分に捧げて出て来る、三ツらせ
て屠蘇を祝ふ

箸をお取り遊はせと云ふ喰積や

十時出発、同[redacted]五十五分の[redacted]電鉄にて
小田原に帰り[redacted]腕車を雇ふて熱
海に向ふ 此の道山越七里なり。
城山を望みて、

山[redacted]焼くや豊公小田原の城を攻む
此の間に石垣山の古戦場あり。
山中江の浦あて書食、古代そのまゝの建
場ながら[redacted]酒の佳なる
ことに鶯鳴くげなり、ブダ化の煮肴、蛤の汁、
糸をたゝいて味ふに堪へたり。

山行けばたじめて松を立てし家
真鶴の濱風[redacted]景殊に佳し、大嶋ま
で十三里、[redacted]ハジてまで三里とぞ。
伊豆山まで、

門松やたをやめ通る山の裾

五時半熱海着、

伊豆山まで、

門松や たちやめ通る 山の神

五時半 熟海着、

今朝梅林●よ金色夜叉の梅を見る、富山唯一筆の人物なるのみ。

瓜山の日のすたる処 遠羽子す。

いづれを見ても山家育ちさ

紀伊の宮 樟今の神よ詣づ。塩ゆの樟

幾千歳 [redacted] 作りぞ

神を正しうす。

すゆの春 大樟よ 雲かゝる

ゆる例年より此一寒咸きゆき中ゆる梅

ゆる蕾ゆる。

梅はやき夕暮日金ゆる哉

に●が衣と謂ふ、西風の寒きが富熟

海の名物なりとか、三嶋街道より十國峠

ゆる、今日は風風ぎ 暖温暖、三月三度

雲の如き湯ゆる巻ゆて湧き出づる湯は寒

ゆ壯觀ゆ ゆ候。

後便 [illegible]

二月

麦人 [illegible]

鐘花

星野麦人翁みづから得たりとのみ
わが著書『続明治文學史』に收めつ

麦人遺稿

星野麦人翁の名ひ得くらるよしみて
わが著の続明治文学史に收めつ